7 昭和63年(1988年)7月10日 教皇様の殿 (昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
JULY, 1988 毎月10日発行 第99号

教皇様の殿

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

互いに善きサマリア人に

1 愛する友人の皆さん。障害者のための仕事となると、キリスト者は自分の信仰の中に一層深い動機と特別な力の源を見出すことができます。

福音書は、イエズスが善を行ないながらあちこちに行かれたことを記しています。イエズスは、肉体的にであれ精神的にであれ、苦しんでいる人々を歓迎なさり、また、捜し求めておられるのです。そうして、神の愛と信仰による彼らの救いについての福音を宣言なさいました。その救いには身体と霊魂が共に含まれています。虚弱な人々——足なえ、中風の人、盲目の人、耳しいの人——を慰めることによって、主はこの人々を悲惨な状態から救い出そうと望まれました。癒しは、彼らの信仰に応えてなされ、主が「起きて歩め！」と宣言なさった、より一層完全な生命のしるしでありました。

イエズスは苦しむ人の傍にいて、その苦しみを和らげるだけでは満足されず、御自分の身にお引き受けになりました。自ら進んで苦しむ人となられ、最後には拷問や死刑を宣告された人々の苦しみをも含む苦難を体験なさいました。そうして御父の愛子であるイエズスは、御自分の生命を犠牲となさったので、神は彼を死者の中からよみがえらせ、キリストは私たちのために生命の門を開いてくださったのです。キリストは生命こそ決定的な言葉であることを保証してくださいました。

イエズスは次のようなメッセージを残されました。障害をもつ皆さんは、イエズスと共に戦い、体を苦しめる障害を克服するように努めなければならないということです。科学と技術の助けを得て、また、勇敢な愛をもって努めなければなりません。

私たちが互いに善きサマリア人になる方法は次のとおりです。(回勅『苦しみのキリスト教的意味』28〜30参照) 瀕死の重傷で苦しむ人の傍に立ち止まるだけでなく、「私の兄弟姉妹の一人にしたことは、私にしてくれたのである」とキリストが、自分と同じだと仰せになった苦しむ人に、有効な手段を施すことによって。私たちが身を賭して尽すことによって。

「何故」苦しむのか

2 イエズス・キリストにおいて愛する兄弟姉妹の皆さん、肉体的悪に対する不撓不屈の戦いの高潔さについて話してきましたが、これは実に神の御旨であります。

しかし、皆さんの苦しみの神秘はもっと深いものです。今年の2月11日ルルドの聖母の祝日に私が書簡に書いたように、皆さんと共に苦しみの奥を深く考えたいのです。「人間のあらゆる苦しみの中心に必然的な問い『何故』があります。それは原因や理由を尋ねる質問です。また、主の苦しみの目的は何か、そして最後には苦しみのもつ意義を尋ねる質問でもあります。」(前出9) 「殆どすべての人は、苦痛が始まると全く人間的に『何故』と抗議します。」(前出26) 苦しむ人は、ヨブのように神に、そしてキリストにもこの質問をします。たとえ人が障害の二義的な原因を見つけ、障害を克服する希望をもち、意志とリハビリテーションでどうにか克服したとしても、やはり主観的な問題『何故』は残っています。何故この束縛が私の人生のこの時期に？ この神秘は私たちから離れません。人間のあらゆる試練が人の仕事につきまとうのと同じです。

キリストは十字架から、自らの苦しみのどん底からお答えになります。それは、抽象的な答えではありません。神の呼びかけであって、私たちは聞きとるのに時間がかかるのです。

キリストの答

キリストは、外から課された御自分の苦しみに、万人を贖う価値を与えられました。御父に対する従順から、また、罪と苦しみと死との究極の原因から人間を解放するため、つまり人間に対する愛から、キリストは苦しみを受け入れられました。私たちが苦しみを受け入れれば、この贖いの御業に参加できるのです。この承諾は宿命でもなければ、あきらめでもありません。それは、私たちが続けなければならない悪との戦いなのです。けれども神は、キリストの十字架と共に私たちが苦しみを捧げることによって、悪から善を抽き出してくださいます。これを経験している方、経験したことのある方が大勢おられると思います。苦しみは残っていますが、心は晴ればれとして平和に包まれています。そういう心があれば、苦しみなんて無益だ、との感情に打ち勝つことができます。(前出27) 心は愛に向かって開かれ、まわりの人々が自己を抜け出て自らを与えるように仕向けます。このような心は信仰と希望の証人となります。その心は、諸聖徒の交わりの秘義において、世界中の兄弟姉妹の救霊のために捧げることができると信じています。キリストの贖いの使命に入り込んでいくのです。(八七・九・十)

(『苦しみのキリスト教的意味』の邦訳は中央出版社発行)

祈りによって活気づく聖職

公会議以後の合衆国の聖職者たちにとって大切な経験だったことの一つに、霊的生活の復興があります。多くの聖職者が、兄弟的精神に基づく団体の中で、霊的指導や黙想会その他の賞賛に値する努力を通じてこのような復興を求めてきました。聖職者たちは個人的な祈りの重要さに気づき、自らの聖務に再び活気を取り戻すようになりました。

祈りと聖務（役務）の内にキリストを見出し続けるなら、よき牧者であるキリストこそがみなさん方の生活の中心であり、司祭職の真の意味を成すことがよくおわかりになるはずです。

兄弟のみなさん、私は祈りについて話していますが、みなさん方の知らないことを話そうとか、実行もできないことをさせようとしているのではありません。神学生となる以前から、祈りはみなさんの生活の一部となっています。しかしご承知のように、祈りにおいて忍耐するのは難しいものです。精神の枯渇、気を散らさせる様々な出来事、もっと時間を有効に使えと誘惑する（合理的）な考えなどが、祈ろうとする人々をしばしば襲います。時にこれらは避けがたく、司祭の祈りの生活を脅かします。

私たち司祭にとって、祈りは贅沢でもなければ、都合に応じて取り上げたり片づけたりできる選択品でもありません。祈りは司牧者の生活にとって必須です。祈りを通して、教会と私たち自身の中でお働きになる神の霊を感じ取る力が強められるのです。そしてさらに、人々の存在を認め、「人々の必要とするもの、生活と運命に関心を持つ」（司祭への聖木曜日の手紙、一九八七・第十一番）ようになるのです。確かに、キリストが私たち司祭に委ねられた人々を、祈りを通して愛することができるようになります。司祭の生活と任務にとって特に重要なのは（大いなる賛美の祈り）すなわち『教会の祈り』（聖務日課）で、これは教会が司祭に要求し、司祭が教会と主イエズス・キリストの名において唱えるものです。

近年私は司祭たちから、彼らが（司祭の職務における支え）の必要性を感じるということをよく聞きます。今日の司祭の仕事に対する試練は非常に厳しく、私たちの時間と活力を日増しに強く要求しています。このような状況では、私たちはいとも簡単に誘惑に負けて落胆してしまいます！　しかし兄弟のみなさん、このような時代には、今までにも増してヘブライ人への手紙を心に銘じなければならないのです。

「信仰の創始者であり完成者であるイエズスに目を注ぐようにしよう。イエズスは差し出された喜びのために、恥をもかえりみずに十字架を忍んだ。（…）これほど罪人からの逆らいを耐え忍ばれた御方を考えよ。それはあなたたちを倦かせぬように、また失望させぬようにするためであった。」（ヘブライ12・2～3）

司祭の任務において堅忍するためには、キリストが「たったひとつ」と教える「必要なこと」があります。（ルカ10・42参照）　牧者であるキリストをよく知らなければなりません。私たち司祭の源であり最高の模範であるよき牧者（キリストとの深い個人的な関わり）をもたなければならず、祈りにおけるキリストとの一致が必要とされます。祈り、特に御聖体の聖変化前の祈りにおいて、キリストへの愛は何度も高められるのですが、この祈りは司祭の独身生活の土台となっています。キリストへの愛は、さらに私たちが神の王国に仕える者として、人々を惜しみなく、清く、深く愛することのできるようにしてくれるのです。

兄弟のみなさん、キリストに仕える同じ司祭として、私たちは同じ喜びと悲しみを分かちあうのです。今日みなさんと共にいられるのは私にとって何という喜びでしょう。みなさん方が自らをキリストと教会に捧げておられることを、いま再び感謝します。キリストとその民に仕えようと努力するみなさん方のすぐそばに私がいるということを、知っておいていただきたいのです。私の感謝、祈り、励まし、愛を受け取ってください。「見よ、何と美しく、快いことか。兄弟のようにともに住むことは。」（詩篇133(132)・1）　この喜びを私たちそれぞれが常に感じることができますように、という願いをもって締めくくりとさせていただきます。

聖母マリアの御保護と慈しみ深い愛は、私たちすべての司祭にとって大いなる心の支えです。聖母の祈りは私たちを助け、聖母の模範が私たちの課題となり、聖母が近くに在（いま）すことが私たちの慰めとなります。聖母が共におられるので、私たちは切望する喜びと希望をもつことができるのです。親愛なる兄弟のみなさん、私たちが叙階式で行なったように、今この時において聖母マリアを仰ぎ見、自らを、人々を、そして自らの聖なる任務を新たに聖母に託すべきではないでしょうか。なぜかと言えば、神とキリスト、そして聖霊のために。

「私はキリスト・イエズスにおいてあなたたちみなを愛している。」（①コリント16・24）（一九八七・九・十）

アパレシーダの聖母

霊的巡礼 ⑤

◆今日の心の巡礼で、私はブラジルの女王であり守護者である「アパレシーダの無原罪の御宿りの聖母」の足もとにひざまずき、母としての取りなしを大勢の人たちに示してくださるよう祈り求めます。

「アパレシーダ」の聖母信心はブラジル人の心の中で長い伝統をもっています。三人の漁師が小さなマリア像を見つけたことから聖所が建てられました。濃い肌色の顔に笑みをうかべたこの像は、大漁の魚と共に網の中で発見されました。彼らはこの出来事を聖母の特別な御保護と受けとめたのです。この日、アパレシーダの聖母は「姿を現わされた」、すなわち神がお与えになった聖母としてブラジルの人々の心、家族、教会、歴史の中に常に居てくださいます。

◆毎年五百万人を越える巡礼者がアパレシーダの聖母への愛を示すため、この地を訪れます。両手を合わせて祈る聖母像に、人々は神を崇（あが）め、信じ、希望を託し、愛する者の姿勢と、神の御旨に完全に従い、誰にでも仕える覚悟のできている者の姿勢とを見出します。聖母の微笑みのうちには、神と共に生きる者の喜び、しもべとなり日常の重荷をキリストと共にすんで負う者の幸せをみることができます。また、巡礼者の苦しみや希望を受け入れる優しい心、漁師を憐れみ改心を促す心が感じられるのです。子供たちの幸せのために取りなし、人々の信仰と慈悲の心をよみがえらせる仲介者の姿を巡礼者たちは見るのです。

◆今日、聖母への祈りを捧げましょう。聖母が「現われ」てくださるように、ブラジルの子供たちの中にもう一度姿を現わし、助けてくださるように。（…）

昨日のブラジル人と同様今日のブラジル人も、「アパレシーダ」の聖母を崇敬し、キリスト者として生きるにあたり力と支えを得、神の御言葉に対していつも忠実を保ち、兄弟への変わらぬ奉仕を行なうことができますように。

◆この願いは今の典礼の時節にも適っています。四旬節は清め、祈り、思いやりを示す時なのです。すべてのキリスト者がこの時期に人生を真摯（しんし）に見直し、聖霊が心の内に響かせる囁（ささ）きを素直に聴き取る勇気を持つことにより、各々が内面の立て直しを求められていることを感じるべきでしょう。

聖母マリアが、私たち一人ひとりの中にこの呼びかけに応えようとする気持ちを目覚めさせてくださいますように。そして四旬節が復活祭に向けての喜びと解放感に満ちた準備の行程という本来の意味を果たすことができますように。（八八・二・二一）

説教・講話・書簡等の抄訳

エルサレムへ
霊的巡礼 ⑥

誰でもどこの国でも、また地方によってはどの町や村も、大小の違いはあっても自分たちのマリアの聖所を持っています。それは修道者と密接に結びついていたり、時にはその地方の人々の歴史と結びついていたりします。

何世紀にもわたって数限りない人たちが、有名な、あるいは名もない聖地へと巡礼をして「マリアの貴重な、あるいは慎ましいイコンに光栄を帰してきました。そして、そこに恩寵と慰め、信仰の光と回心する力、人生の逆境や霊的危機からの避難所を見出してきました。」(『パウロ六世の教え』IV 1966,P202)

誰もがそれぞれ心の中にマリアの聖所の思い出や、それにつながるものを持っています。この聖所で私たちの人生は、聖母の呼びかけと招きを受けて変わりました。聖母は私たちに優しく、そして決然と言われました。「何でも私の子の言うとおりにしなさい」(ヨハネ2・5参照)と。

今日は、聖母の生誕の記念につながる聖堂へ心の中で巡礼に行きましょう。二世紀に書かれたヤコボの偽原福音書の中にある昔の伝承では、エルサレムの神殿の近くを聖母の生まれた家のあった場所としています。五世紀以降のキリスト信者たちは、イエズスが中風の男を癒された(ヨハネ5・1〜9参照)羊門の池の神殿とは反対側に建てられた大きな教会でマリアの生誕を記念してきました。

七世紀には、エルサレムの大司教聖ソフロニウスが聖堂を称えて次のように歌いました。「羊門の池の聖なる教会へ入ろう。そこは名高きアンナがマリアを生んだところ。聖堂の中へと歩を進めよう。いと潔き神の御母の聖堂へと。我がいとしの壁に接吻し、抱きしめよう。おとめなる元后の生まれ給うた父祖の家のかの場所を心にもかけずに通り過ぎたりはするまい。みことばの命令で癒された中風の男が、起きて床を取り上げて行ったその場を見よう。」(Anacr. XX P.G. 87/s 3821−3824)

十字軍の兵士たちが訪れた時、古い教会は廃墟と化していましたが、その傍に「生誕の地の祝福されたマリア」に奉献したもう一つの教会を建てました。この教会は今では聖アンナ教会と呼ばれています。歴史的事実はどうであれ、そもそもの初めから、その地に贖い主の母の生誕が記念されていた事実は残っています。

何世紀もの間、おびただしい巡礼者がかの地を訪れ、至福なるマリアを崇め、その取りなしを懇願し、マリアの〈マニフィカト〉を自らの心として繰り返したのです。常に信仰の旅であり、神の御言葉を絶えず繰り返し忠実に聞きながらの霊的旅路であるあらゆる巡礼の真の模範を、人々はマリアの中に見出したのです。

(一九八七・七・五)

キリストの奇跡は救いのしるし
キリストシリーズ ⑭

1 福音書では、キリストによる奇跡は人類とこの世の歴史に入った神の国のしるしとしてはっきりと示されています。「私が神の霊によって悪魔を追い出すなら、神の国は到来しているのである」(マテオ12・28)と、イエズスは仰せになりました。奇跡についてどのようなことが言われ、また言われてきたとしても、(しかもそれらに対する答は護教論によって与えられています)イエズスが行なわれ、イエズスの御名において使徒たちや弟子たちが行なった「奇跡と不思議としるし」を、正真正銘の福音書の文脈から切り離すことはできません。初代のキリスト信者は、福音書の主な土台となっている使徒たちの説教を通して、最近起こった驚くべき出来事の目撃者の証言を聞きました。従って、歴史批評の観点からその出来事を調べることができたのです。ですから奇跡が福音書に記されていても驚きませんでした。後世の反論がどのようなものであっても、キリストの御生涯と御教えの本当の源泉(情報源)から、確かに一つの事が浮かび上がってきます。すなわち、使徒たちと福音史家、初代教会は、奇跡の一つひとつに自然とその法則を越えたキリストの崇高な力を見ていたということです。神を、父なる創造主、世界の主として示された御方は、自らの力で奇跡を行なう時、御自分が御父と一体であり、天地万物の主宰者に等しい者、つまり御子であることを示されたのでした。

2 ところで、幾つかの奇跡は、救いの摂理(経倫)における人の子の神としての御力を証するという根本的な意味を補う面をもっています。

ガリラヤのカナで最初に行なわれた「しるし」について考えてみれば、福音史家ヨハネが記していますが、この「しるし」によってイエズスは、「(御自身の)栄光を示されたので、弟子たちはイエズスを信じた」(ヨハネ2・11)のでした。奇跡は信仰を引き起こすためでしたが、婚宴の席で行なわれました。従って、少くとも福音史家の意向によると、その「しるし」は、新旧両約聖書の中でしばしば結婚というイメージで表わされている(契約と恩寵の御計画)を強調しているのです。そこで、ガリラヤのカナの奇跡を、王がその息子のために用意した婚宴のたとえ話と関係づけ、その婚宴に「似ている」世の終わりの「天の国」と結びつけることができます。(マテオ22・2参照)すなわち、イエズスの初めての奇跡をこの王国の「しるし」として理解することができるのです。特に「イエズスの時」、つまり御受難と栄光の時はまだ来ていなかったからです。(ヨハネ2・4、7・30、8・20、12・23〜27、13・1、17・1参照)その「時」は「天の国の福音」を述べることによって準備されるはずでした。(マテオ4・23、9・35参照)マリアの取りなしによってなされたこの奇跡は、まさに起ころうとしていることの「しるし」、象徴的告知とみなすことができます。

3 カファルナウムの近くでパンを増やされた奇跡は救いの摂理(経倫)の「しるし」であると考えれば、より一層はっきりと理解することができます。ヨハネがこのしるしを翌日のイエズスの教えと結びつけています。その教えの中でイエズスは、「神から遣わされた者を信じ」(ヨハネ6・29)、「消えることのない食べ物」を求めよ、と教えられました。そして御自身が「世に命を与える」(ヨハネ6・33)真のパンであること、「世の命のために」(ヨハネ6・51)肉をわたされた御方であることをお示しになりました。救いをもたらす御受難と御死去の前触れであることは明白でした。それは、御受難の前夜に永遠の生命のパンの秘跡として制定されたユーカリスチア(御聖体)の準備だったのです。(ヨハネ6・52〜58参照)

保護し活動する現存

4 ゲネサレト湖で嵐を静められる。これは歴史を歩むうちにさらされる嵐の時にも、教会という(船)にはいつもキリストが現存し

不変の教え

ておられる「しるし」として理解することができます。弟子によって目を覚まされたイエズスは、風と海を戒められました。すると大凪になりました。その時イエズスは、「なぜ恐れるのか。まだ信仰がないのか」(マルコ4・40)と言われました。他の出来事と同様ここにおいても、イエズスの神としての助けに疑いを抱くよう誘惑されそうな歴史の中の大嵐の時、弟子たちや使徒たちに対し、働きと保護を伴う御自身の現存を信じさせるというイエズスの意向がみられます。事実、奇跡はイエズスの現存の「しるし」であり、また信者と教会にとってイエズスを信じる保証である、とキリスト教の教えと霊性は解釈しています。

5 海を歩いて弟子たちの方へ来られましたが、これもイエズスの現存の「しるし」であり、弟子と(教会をいつも見つめていてくださること)の証です。イエズスを見て幽霊だと思った弟子たちに、「安心せよ、私だ、恐れるな」と言われました。(マルコ6・49〜50、マテオ14・26〜27、ヨハネ6・16〜21参照)マルコが弟子の驚きの理由を次のように記しています。「彼らはまだパンのことを悟らず、その心は閉ざされていたからである。」(マルコ6・52)次にマテオが詳しく記しています。ペトロは舟をおりて水の上を渡ってイエズスの方に行きたかったが沈みかけたのでこわくなり、助けを求めて叫んだのです。するとイエズスはすぐに彼を助け、やさしく戒められました。「信仰のうすい者よ、なぜ疑ったのか。」(マテオ14・31)「舟にいた人々はひれ伏して、『ほんとうにあなたは神の子です』と言った。」(マテオ14・33)

6 奇跡の大漁は、使徒たちと教会がキリストの救いの力に深く結ばれていれば得られる、宣教の豊かな実りの「しるし」として考えることができます。(ルカ5・4〜10、ヨハネ21・3〜6参照)ルカは、ペトロがイエズスの足元にひれ伏し叫んだことを記しています。「主よ、私から離れてください。私は罪人です。」(ルカ5・8)イエズスは答えられました。「恐れることはない。あなたはこれからのち、人を漁るだろう。」(ルカ5・10)ヨハネは、御復活ののちの大漁と、キリストがペトロに「私の小羊を牧せよ、私の羊を牧せよ。」(ヨハネ21・15〜17参照)と言われた場面を続けていますが、この結びつきは大変意味深いものです。

7 キリストの奇跡は創造における神の全能の現われで、それは人間と被造物を司どる救い主の御力のうちに明らかにされますが、同時に奇跡とは、救いの御業を示す「しるし」でもあるのです。これがキリストの託身(受肉)と共に明らかにされた救いの摂理であり、人類の歴史の中で決定的に実現され、神の御業でもある目に見える世界に刻まれた救いの摂理です。湖上の弟子のように、人々はキリストの奇跡を目の当たりにして、「これは誰だろう。風も海もこの人に従う」(マテオ4・41)とは、と互いに尋ね合います。人々はこれらのしるしを目撃して、御子を通して神が人類にお与えになった救いの恵みを受け入れる準備をするのです。

これが、キリスト時代の人々の目前でキリストが行なわれ、またそのの「ナザレトのイエズス・キリストの御名によって歩きなさい」(使徒行録3・6)のように、キリストの御名の救いの力を通して、弟子たちや使徒たちが行なった奇跡としるしが意図することなのです。

巡礼の目的は刷新のため

◉ 教会法の新しい規則がキリスト信者の生活の中での聖堂(聖所)の重要性と価値とを強調し(『教会法』1230−1234)、司牧プログラムを要約していることは、皆様方は十分にお気づきのことでしょう。

「聖堂では、救霊の手段は信徒にとってもっと豊かに利用できるべきであります。すなわち、せっせと励んで神の御言葉を宣言することによって、典礼生活について適切な励ましを与えることによって、特に御聖体と赦しの秘跡を行なうことによって。」(『教会法』1234第一項)

◉ 最後の数日をかけて皆様は聖職者の職務に伴う責任について熟考なさいました。この職務は、確かに重要な義務の数々を含んでいますが、その義務からは深い喜びと霊的な慰めとが湧いてきます。ですから聖なる情熱に満たされて、皆様に委ねられたマリア信心の場へと帰り、本当に神の聖堂(神殿)であるかどうか調べてください。信者の皆さんが特別なやり方で超自然を経験することができるでしょうか? 信者の皆さんの信頼に値し、また自分の形成に役に立つカテケージスがなされているでしょうか。福音のメッセージを余すところなく組み入れ、教会の教導職の光を受けた要理教育がなされているでしょうか。また、そこでは、それぞれの社会的環境の中で人生の困難に立ち向かい、キリスト教信仰を勇敢に証する覚悟ができるように、赦しの秘跡と霊的指導、聖体拝領を通して、信者の皆さん方のために恩寵と神の慰めを豊かに汲み出すことができるでしょうか。

◉ それぞれの聖堂(聖所)がマリアの家、信仰の住居であり、そこではいつも変わらずマリアが主を喜び迎え、絶え間なく主をこの世に贈ります。巡礼者たちは確かな直観をもってそこへ旅して行き、「マリアの信仰の中に自らの信頼の支え」(『救い主の母』27番)を捜し求めます。巡礼者たちはマリアの家に入って行き、博士たちのように「母マリアと一緒におられる御子」(マテオ2・11)を見つけ、ひれ伏して礼拝するのです。

しかしながら、この神体験を聖堂(聖所)の中だけで終わらせてはなりません。それが根本的な転換点となって、毎日の人生において新しい証しの道を目指し始めるのでなければならないのです。

聖書もこのような方法で巡礼の旅を解釈するよう勧めています。聖書では聖所への巡礼の旅が人の霊的生活の中での決定的な時点として(第二法の書16・16参照)、楽しい共同体の体験として(詩篇84・6〜8参照)示されています。そうした巡礼の旅には、イエズスもまた両親と共に毎年参加なさいました。(ルカ2・41〜42参照)巡礼の旅は主の御顔を捜し求めて、主の家の喜びを経験するように私たちを主の御前へと導きます。主の家は、人が神の示現の中で終わりなき幸福を享受するであろうあの世の終わりの日の前表です。主の家での一日は終わることがなく、他で過ごす千日より遥かに優るものです。(詩篇84・11参照)

このような聖堂の体験は、その歴史、その記念物、その恩寵、その光輝と共に巡礼者の驚きと信仰の喜びをかきたて、新生活に歩み入り、羊飼いたち(ルカ2・18)や使徒たちのように見たこと聞いたこと(使徒行録4・20)をすべての人々に告げる決心を燃え立たせるのです。

◉ 皆様はヨセフのようにマリアの家の守護者です。神の慈しみのすばらしいしるしを見に来るすべての人々に扉を開き、御言葉と典礼と秘跡をもって聖堂の心臓部へと導いて行きます。この聖職の中で特に大事なのは、皆様の信仰の証し、キリストの弟子として、マリアのしもべとしての証言です。

(マリア聖堂・聖地の主任司祭へ)

(一九八七・十一・二十六)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393